

GR
白雲軒

とり
み



26

昭和48年4月1日

宗教法人

鳥居観音

四天王（表紙）説明

表紙の写真は、救世大観音屋上南方の増長天です。

四天王は、インドの神話時代から沢山の軍隊をひきいる護世神として信仰されておりまして、仏教は之を取り入れたものです。

四天王は、インドでは貴人の姿でしたが、中国、日本と伝来するに従い武人、忿怒の相の天部形と変りました須弥山（ヒマラヤ山脈）はインドの神々の住する崇高なる霊地として、インド人は非常な尊敬をしております。

そして四天王は、ヒマラヤの四方に住して多くの眷属を従えた大將軍でして、今は仏教の守護神となっております。

四天王は、東、西、南、北の梵字であります。

東（ダイズラタ天）持国天、西（ヒルバクシャ天）広目天、南（ヒルロクシャ天）増長天、北（ビシャモン天）多聞天です。日本でも須弥壇や、密教壇等の四方を守護する天部として広く信仰されております。

救世大観音も、白雲山を須弥山になぞらえて、其の足下の堂宇の四方にこの四天王を安置したもので、この高所より、衆生を警護しておられるのです。

四体共、総高三米あります。

広目天



多聞天

持国天



と り る 4 月 1 日 発 行 26 号

目 次

表紙	救世大観音の南方を守護する増長天	
表紙裏	四天王についての説明	
インドネシアの旅	……………	(其の一) …… 桐 江 …… 二
法 句 経	……………	(其の一) …… 七
導光禅師御法話	……………	(其の九) …… 八
西 遊 記	……………	(其の二十一) …… 一二
「壹万巻写経奉納者芳名 第一集」		
田 舎 医 者	……………	(其の六) …… 見川鯛山 …… 一七
壹万體観音奉納者芳名 第十二集	……………	…… 二三
鳥居観音だより	……………	…… 二四
裏表紙	鳥居観音案内図と諸行事のお知らせ	



インドネシアの旅

其の一 桐江

赤道直下の国インドネシアは、十数年前、スカルの大統領によりオランダから独立した事や、スカルの大統領の末路や、デビ夫人等の事で記憶に新たなものがあります。

又インドネシアは、ボルネオ、ジャワ、スマトラ、セレベス等八千有余の珊瑚礁の多い美しい島国で、何となく行ってみたいと云う憧れの国でした。ところが最近日本と同じ大乘仏教の大遺跡「ポロブドール」が世界的に有名になりました。

この仏教遺跡ポロブドールは紀元の始め頃インド人技師により建造されたもので、ヒンズー教と共に教百年の間殷盛を極めた所で、回教の猛烈な迫害により、仏教は亡びましたが、根強いヒンズー教には抗する事が出来ず現在は回教は或る島の一部に残っ

ているだけとの事です。

日本と同じ大乘仏教の遺跡ポロブドールは、カンボジアの小乗仏教であるアンコールワットに比する有名な石造建築です故、私もぜひ一度巡拝したいと思いました。然し私のような老人は団体旅行は無理ですが、娘さつき、まりえの二人がステッキガールになってくれるという幸条件に恵まれこの夢を実現する事が出来ました。昭和四十七年七月十六日、私は満八十才、妻とみ七十六才。子や孫達大勢に見送られて、幸い七号台風もそれたので、水入らずの四人で羽田を飛び立ちました。

空の思い出

高度一万米を飛行中、台湾上空にさしかかります

と右に中国大陸、左にフィリッピン群島が水平線に見えると云う実に雄大な眺望です。

頼山陽の「雲か山か呉が越か、水天髣髴として」の有名な詩を一層雄大にしたこの景色を見る事の出来たのも長生きしたおかげです。

ベトナム上空は危険なので、ホンコンに立ち寄り、迂回してバンコックに一寸立寄り、シンガポールに飛びました。

上下数層の雲は色も形も様々に違い目まぐるしい程刻々に変化します。最下層の雲は海面に浮んでおる氷山の様で、最上層は五色にたなびき其の間にはものすごい入道雲等が目を見はらせます。虹は地上では虹の橋と言われる半円形ですが、空の虹は円形で之が又二重の円となって、仏像の光背のように美しく夕日に映える東の空は、オーロラもかくやと思われ程の美しい事もあって何度見ても空の旅の楽しさは最高です。さつき（姉嬢）は八ミリ映写で夢中で写したため、フィルムが足りなくなりそうだとペソをかいています。

時計の時差二時間を進めて、十七時三十分シンガポールに着、出迎えのバイヤーに案内され、ヒルトンホテルに投宿しました。

七月十七日、八時、小型のジェット機でシンガポールの出発。シンガポールは小さな国ですが、沢山の島々のかたまりで美しい眺めです。スマトラを過ぎると、インドネシアの首都であるジャワ島の入口に近代的な都市ジャカルタに一寸立寄り、又飛び立って細長いジャワに添って東進します。ジャワ島の中央山脈には、富士山に似た山が雲の上にくつとなく顔を出しており火山湖や活火山等、珍らしい山々が眼下に見えます。ジャワ島を通り過ぎると瞳れのバリ島のデンバサールに昼頃着きまして「ビーチホテル」に荷物を置きます。ホテル以外は田舎町の南国風景です。

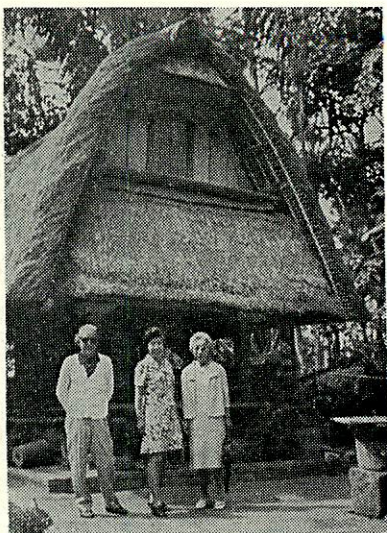
バリ島は四国の半分位で人口は百八十万です。空気が乾燥しているので三十二度以上の暑さも、こたえません。只外国旅行はいつも一日に四五回もの食事のサービスですが、量に注意しましたので体の調

子はよく快適な旅行でした。

午後町見物に出かけました。全島ヒンズー教徒で洋風建築や電気も少なく昔ながらの竹の柱に椰子の葉の屋根の家ばかりで住民も日本人に似ており親しみがありまして観光満点の所です。

民家の入口にはヒンズー教、独特の石門を簡単にしたような入口があるのが印象的でした。

この石門をくぐって何軒かの農家を訪れました。老人夫婦は必ず別棟に住むという、現代日本のババ

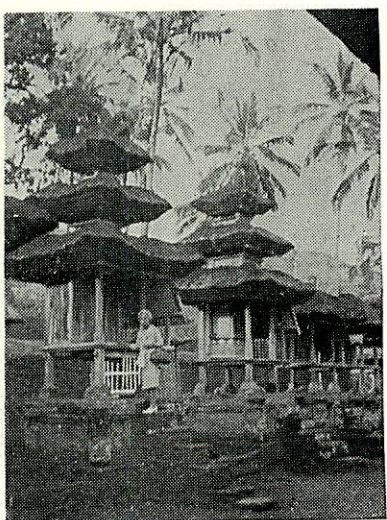


バリ島の農家

一ぬぎの習慣が古代から美しく実施されています。

床ゆかは一米位高く、ハンモックのような寝台と、土間には、簡単な台所があり、鍋らしきものが幾つかあるだけで皿などは一つもなく原始的なものです。

庭には娘がにこにこ笑いながら稲の穂を叩いています。この稲穂は田で穂先だけ三センチ位に切りとり一握り位づつにたばねてあります。椰子の葉が凡て利用されるのでワラの必要がないため穂を取った跡の稲田には火をつけて焼いて其のあとに又種を



家々にある椰子の葉でふいた神々の祠



鐘楼 →

↑ 木鐘

蒔くと云う原始的ではありませんが農薬の害が全くない合理的な農法です。どこの家でも立寄ると全員出て来て人なつくく歓待してくれるので実に居心地がよいのです。

豚は猪そつくりで野放しですし山羊は一米以上の

高い床の上の小屋で飼育しているのは何か理由があるのでしょうか。殊に斗鶏は最も盛んな為めか野生的なシャモがどこの家にもいるし鶏を籠に入れて斗鶏場に行く姿や夢中になってわいわいさわいである斗鶏場にも立ちよって見ました。此の斗鶏こそ島民の唯一の娯楽のように思われました。又どこの家にもバリ島独特のヒンズー教の神々を祭っているとされる三米位の細高い椰子の葉屋根の面白い形の祠が数基並んでいるのも興味を引かれました。

鐘 楼

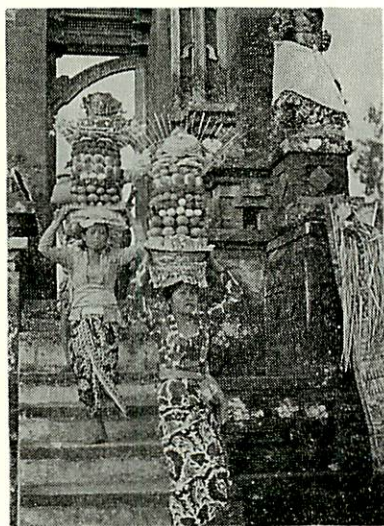
村の所々に必ず鐘楼が目につきます。下の方は彫刻した石を積み上げ木造の塔の屋根は多く椰子の葉でふいた面白い形で、三米位から高いのは、六、七米位もあります。私は、鳥居観音の鐘樓を造り度いと研究しておりますので、最も興味深かったです。中央にぶらさげである鐘は非常に堅い木で（チャンプルン）と言ひ長さ一米〜二米位の丸木の中をくりぬいたもので一本或は大小二本つるしてあります。

昔は中をくりぬくのに焼石を使ったとのことだ。日本のお寺の木鐸のような音でしょうが、よい音色だとの事ですが集合や、お祭の時等でないと叩かないとの事で遂に音色を聞く事は出来ませんでした。但しジャワ島では火事の時にも叩くとの事です。

バリ島のお祭り

美しく着飾った村娘が沢山頭の上に花や菓子等色々な物をのせて歩いているので、何かと聞いたら、今日は半年に一度のお祭りで、神様に供えるために運んでいるとの事で其神様におまいりする事にしました。

社殿の横に祭壇を設けて、娘達の運んで来た供物を奉納しています。この祭壇には色々の旗や七夕の時のように色紙でいろいろ美しく飾りつけ沢山の裸灯明（ヤシ油の皿に灯心の火）やカンテラを沢山つるして、薄暗がりの境内には小さなお堂が十基位もあり、それぞれ灯明と供物を上げてあり、実に珍しいものです。



祭壇に供え物運ぶ島の娘

其時一人の婦人が愛想よく何くれとなく親切に案内してくれましたが、この娘さん実はダンスのスタ1で此夜のホテルの屋外食堂の舞台で、実に上手に舞って観衆の拍手の的でした。ケチャックダンスでも主役をやっている人との事で驚きました。

お賽銭に硬貨一枚上げると神子が変わる顔をしたのでは少なかつたと思ひ、他の硬貨にかえると喜んでくれました。始めのは日本の十円、あとは百円だとの事で、銭の使い方は度々失敗します。

法句經

(其の一)

六十二番

有^リ子^レ有^リ財 私^ハ子^ハ供^モある^シ財^産もある^ト

愚^ハ唯^レ汲^ク々^ニ 愚^者之^ニと^らわ^れて^汲々^として^居る

我^ハ且^ツ非^レ我^ニ 併^シ我^身已^ニに^我が^もの^にあ^らず

何^レ有^ニ子^財 一^いわ^んや^吾に^子や^財が^ある^うか

父親は子供に家業をつがせようとしたり、又母親は教育ママと云はれるなど、子供を自分の思う様に導こうと苦心しておりますが、併し今日の思想は全く之に反し、親子の断層は甚しく、親は老人ホーム行きか、一人淋しく死ぬ人さえあります。

又財産も生活するためには必要なものですが、人間の欲望は無限でありまして、儲ける事に汲々として居り其の為の争はたえませぬ。

そこで釈尊は欲望の亡者の様な人間に対し

「自分の体は已に自分のものではないから自分の思う様にはならぬ、いわんや子供や財産は幻の様なものであるのに、之に汲々として居る人間程馬鹿なものはない」

と極めて厳しく警告して居られるのが、此の句であります。

法句經は釈尊がとかれた真精神を短い詩にして四二三集めたもので、人間がたった一度しかない尊い一生を意義あらしめる為に最もよい指針となると思ひます。

一八六番

天^ス雨^ト七^ツ宝^ヲ 天^カら^七宝^が雨^の様^に降^つて^来ても

欲^ハ猶^シ無^レ厭^ク 諸^々の^欲は^満足^する^事が^出来^ない

樂^シ少^ク苦^多 欲^は樂^しみ^が少^なく^て苦^痛が^多い

覺^ル者^ヲ為^レ賢^ト 賢^き者^は之^を知^つて^居る

欲は満されて一時は満足するがすぐ其の上の欲が頭をもたげて来てどうにもならない。そして利巧でも馬鹿でも人間である以上皆同じで「覺れる者を賢者とせず」の賢は欲をぬけ得た覺者の事で利巧な者と云う意味ではありません。

釈尊が山中で一人坐禅をして居られた時惡魔が出て来て

「釈尊は何でも自分の思ふ様になる偉大な力を持って居るのだから、ヒマラヤ(山脈)を化して皆黄金とする事が出来るだろう」と問ふた所、釈尊は「かのヒマラヤ山を化して黄金となし、更に是を三倍にしてもよく一人の欲を満す事は出来ない」と答へられた。このはてしない欲望こそ人間の苦難の根源であるとみる処に仏教の特色があります。



道光禪師
（故高階瓏仙猊下）
御法話

（其の九）

観世音菩薩

観音さまについて述べてみましょう。まずそのお名前ですが、通常は単に観音さまと申しておりますそれは音声縁として悟道を得た、お方だからです。また観世音菩薩とも申します。それは観音経のはじめに、無尽意菩薩がお釈迦様におたずねしますとお釈迦様はあらゆる階級を論せず、男子でも女人でも、世を渡る間において、もろもろの苦しみに悩むとき、一心にこの観世音菩薩を念じて、そのみ名を称えれば即時にその称える音声聞いて、その人を苦しみから救って下さるといふことから、即ち世間

の音声を観ずるといふお名前であります。

その観音経の御文を読んでもみますと、無尽意菩薩の問いに、「何の因縁をもって観世音と名づくるや」仏、無尽意菩薩に告げて曰く、「善男子もし百千万億の衆生ありて、もろもろの苦悩を受けんに、この観世音菩薩を聞いて一心に称名せば、観世音菩薩は即時にその音声を観じて、皆解脱することを得しめん。」と、すなわちこの菩薩は、この苦しみの多い世の中を救済するという、大慈悲心で臨んでいられるからであります。それでまた救世大士とも申してあります。あるいはまた、観自在菩薩とも申します。これは二つの意味の自在の力を持っているからであります。

一は大智慧の力をもって、真理の光明を自由自在におとらえになっていることです。

二にはこの世の中を救済するに自由自在の活動力をもっていられることでもあります。

そうして、その活動は微に入り細をうがち、あらゆる方面に円転自在ですから、また円通大士とも申

し、さらに、観音経の中には怖畏急難のなかにおいて、よく無畏を施したもう、この故に娑婆世界皆これを号してまた施無畏者となす、と申します。

それで浅草の観音さまに参詣しますと、皆さんが拜む頭上に細井広沢という昔の有名な書家の書いた「施無畏」と云う大字の額が上がっております。

かようにして、観音さまのお働きは、時と処と縁に応じて八方に働かれますので、普門と申します。

即ち、四方八方あらゆる方面に向かつての活動であるからです。故に法華教の第二十五の巻は観世音菩薩普門品であります。それには三十三通りに姿まで変えて、大慈悲心の救済にいそがしい様子が説いてあります。そのお姿は普門品をよむ方はご承知であります。実は三十三身どころではないのですが、ここでは省略いたします。

同じく観音経には「十方国土刹(国)として身を現わさずということなし」とあります。ということ、極楽や天国にかまえていて、くるものを待つのではない、自分から縁あるところにふみ出していつ

ての救世であります。魚籃ぎょらん観音の一例を申してみましよう。

魚籃とは、魚を入れる籃を持っていられるから申したのです。それが今ではたいへんに美化されて、高貴の美女が魚を入れた籃をさげて、いかにも優美な画題とされていますが、実はある漁村の娘に姿をかえて、陝右という無信仰な部落を信仰化せられた話であります。

その大略をお話いたしますと、年号はただ元和年中とありますので、いま年数はしらべかねますが支那(今の中共)陝右というところに観音さまの教化の時節が来たと見えました、もとより無仏法のところですから、方便でいかねばならぬと、観音さまは漁村の娘になって、その部落に入りこまれることになりました。ところがそれが、なかなかの美貌であったため、土地の青年らが、これを妻にむかえたいという希望から、結婚を申しこむ者が大勢でてきました。(三十人)あったとかかれています。

婦人は一身で、多数の希望に応ずるわけにはいき

ませんから、一つの案を出しました。それは明朝までに、観音普門品を暗誦する人があったならば、その人へ嫁入りしましょう、というのでありました。

そこで多くの青年たちは、われこそはと一しよけんめいに、この普門品をけいこしました。翌朝になりますと、二十人も読む者ができました。これでは仕方がないというので、今度は金剛経を宿題に出されました。これは観音経の約三倍もの長さがありますが、それもまた翌朝に至って十数人も合格者がありました。そこで、今度はだいぶ問題を大きくしまして、法華経八卷全部を三晝夜で覚えた人にといいうことになったとき、十数人の青年たちは、われを忘れて勉強をしました。結局それに首尾よく級第したのは、馬と云う姓の青年でありました。

よって、約束の通りそれに嫁入りすることになって、早速その家に迫えられました。しばらくするとこの婦人は気分が悪いといので、一室に入りましたが、間もなく死んでしまわれました。一方その家では勝利に誇って、もつともさかんに婚礼の準備を

やっていました。喜びが変じて悲しみとなつてしましました。仕方なく婚礼を葬式にかえて、丁重に葬り、ねんごろに弔っておりました。

それから数日を経て、一人の旅僧らしい老僧がやってくる。その女の由来を尋ねたので、その当時の模様を話しますと、この老僧がその墓地にお詣りしたいといいます。そこで皆がこの老僧を墓地に案内をしました。すると老僧が墓地を撥ひらいて見よと云うので、指図によって発掘してみると、不純な死体はなくて、黄金の骨らしいものが一片遺されているばかりでした。みんながおどろいておりますと、僧はおもむろに申されました。

「これはこの無信仰の土地に、方便を施された観音さまのご教化である。」とい終ると、どこへともなく、立ち去ったということです。

このように、一たん馬氏のところへ嫁するといふ縁を示されたから、これを馬郎婦の観音ともいいます。「郎」とは支那で、その家の若旦那という意味であります。かくしてその土地には観音経、金剛経、

法華経の聲が、それ以来絶えないようになりました。観音さまはかほどまでして、この娑婆の救いに努力して下さるのであります。

これは、観音経の普門品の三十三身のなかに、婦女身をもって濟度すべきものには、婦女の身を現じて説法するとあるのがそれです。このようなものを、現身説法といひまして、身をもつての教化であります。

観音さまのお姿を拝しますと、いかにも女性で弱しく見えますが、あれは大慈悲の心相を表現したものであります。観音さまは常に三つの力に充実しておられます。それは大智慧の力と、大慈悲の力と、大活動の力とであります。前に観自在のお名前について申しましたように、真理の光明をつかんでおられますのは、大智慧の力であります。それから人の世に臨んで、無限の救済に赴かれずにはいられない大慈悲の力であります。そしてそこから動いてくる救済の実動は、観音さまの活動の力です。

観音普門品偈という段には、具体的にその力の救

済が十三ほどあげてあります。その二、三を讀んでみますと、

或人が、害意を興して、そのために大火坑におし落されんにも、彼の観音の力を念ずれば、火坑變じて池とならん。

とあります。つぎに、

あるいは巨海に漂い流されて、竜魚、もろもろの鬼難あらんにも、彼の観音の力を念ずれば波浪も没すること能わじ。

とあるのは水難をまぬがれることであります。また衆生困厄を被りて、無量の苦、身にせまるとも、観音の妙智力はよく世間の苦を救い給う。というように、いろいろの実例が挙げられて、そしてその次ぎには、神通力を具足し、広く智慧の方便を修し、十方もろもろの国土刹として、身を現わさずことなしと説かれてあります。

このような、観音さまを理想として、自力更生に精進をされたならば、真に生きる救済の力は、その人によって得られるであろうと思ひます。



西遊記

(其の二)

岡部千三

とらか法師か

悟浄は一人で、くやしっぱかりでなく、泣きたいくらい。

「こら、いばるな、黄ほう郎。わし一人つかまえてかったと思つておるとちがうぞ、みていろ、そのうちに八戒がもどつてくる。そうすると宝象国の大軍もなア、おしよせてくるだろう。その時になつて、悟浄さん。おたすけくださいなんてわめいても、かまわんぞ。」

「なに宝象国の兵がくるとな、ふふん、それはおかしい。……さては、姫が、何か云つてやったのだな。これ姫。」

黄ほう郎は。百花しゅう姫を呼んできいてみた。

「国王に、しらせたろう、でなければ、お前がここにいろのを、国王がしるはずがない。どうしてよけいなことをしたのだ。おれがおこつたら、どんなことになるくらいわかつているであろう。」

「知っています、ですからしらせなどいたしません。あなたは感じがいらしています。」

と姫は、ふるえながら云つた。

「そうだとも、姫の知つたことじゃない。八戒とわしがお師匠さまをここからつれだして、宝象国へいったとき、国王の所に姫の絵があつたからわかつたのだ。おしえたのは、わしだよ。」

と沙悟浄は、姫をかばつた。

「そうか。坊主め、どこへにげたかと思つていたがそれでわかつた。よけいなおしやべりをしたおまえ

壹万卷写経奉納者芳名

第一集

◆四八年二月現在
◆敬称省略させて
いただきます

(名栗受付)		氏名	卷数
高松善右左門	野村博子	西村みつ	一
高野造	山口敏夫	久保田秀一	一
佐伯智子	浅野睦子	久保田陸子	一
浅間公雄	佐伯徳造	山口敏夫	一
猪熊夏子	岡部千三	浅野睦子	一
平沼蓑作	枝久保鶴四郎	佐伯徳造	一
関 柢二	鈴木恵子	岡部千三	一
今泉濱子	鈴木恵子	枝久保鶴四郎	一
内山平蔵	森田記子	鈴木恵子	一
最上圭子	筑摩英子	森田記子	一
最上取作	石原玉枝	筑摩英子	一
最上弘之	江崎元堂	石原玉枝	一
渡辺仙	島田香代子	江崎元堂	一
渡辺美智子	渡辺美智子	島田香代子	一
加藤静子	高島幸子	渡辺美智子	一
高島幸子	宮原芳子	加藤静子	一
奥山幸	坪井昭子	高島幸子	一
藤田秀雄	折原禎三	奥山幸	一
松井富美子	鈴木功子	藤田秀雄	一
鈴木功子	小原秀雄	松井富美子	一
鈴木功子	浅見茂一	鈴木功子	一
山口真毅夫	武川修身	浅見茂一	一
武川修身	中安鉄夫	武川修身	一
堀切勝二	黒沢宏国	中安鉄夫	一
黒沢宏国	後藤滉	堀切勝二	一
書問広吉	野方武	黒沢宏国	一
野方武	及川正	書問広吉	一
及川正	小西合三	野方武	一
内藤合三	高橋正之	及川正	一
高橋正之	井上孝東	内藤合三	一
井上孝東	秋山清	高橋正之	一
大木茂	鹿島昭	井上孝東	一
鹿島昭	三谷良彦	鹿島昭	一
三谷良彦	市川知之	三谷良彦	一
市川知之	成田茂之	市川知之	一
成田茂之	柳沢俊雄	成田茂之	一
柳沢俊雄	前原章	柳沢俊雄	一
前原章	田口力	前原章	一
田口力	稲垣美智夫	田口力	一
稲垣美智夫	岡田吉弘	稲垣美智夫	一
岡田吉弘	後藤英男	岡田吉弘	一
後藤英男	松沢孝明	後藤英男	一
松沢孝明	小島将男	松沢孝明	一
小島将男	古屋正二	小島将男	一
古屋正二		古屋正二	一

矢作由三	瀬田兼治	安原芳太郎	清水榮	佐藤寿夫	臼井実	加藤延作	岡部千代	町田倫平	小林君子	佐々木秀郷	高瀬武雄	安部トミ	石井松次	福島邦子	米山きよ	関文	北村三男	井上明治	神山よし	指田清一	大館栄吉
一一	一一	二	一一	二	三	一一	一一	一一	一一	一	六	一一	二	一一	一一	一一	一一	一一	二	二	二
千原元	木崎猛	北原元光	小島幸博	矢口幹雄	新井忠一	井上秀男	永沢邦夫	関元治	瀬田好雄	森幹一	中川勇	井上正男	樋口誠司	新井甚作	正木三郎	大沢ヤス	原田柳三	斉藤健男	島山志満子	田村八十作	安原貢
二	二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	二	一一	一一	一一	一一	二	一一	一一	二	一一	一一	一一
長谷川秋夫	近藤七郎	岡部亮介	岡部亮介	平松正吉	小島武夫	福井精治	若林二郎	加藤育三	島崎隆雄	若林登志子	岡田孝徳	福井安恵	見富貢	中村英夫	工藤勝彦	高橋智	山沢隆一	大川長信	天海秀夫	保泉敏夫	小林博
一一	一一	一一	一一	一一	二	一一	一一	二	二	一	二	一一	二	二	一一	一一	二	一一	一一	二	二
齊藤勝巳	工藤明子	小園利行	須賀一男	古田勝蔵	浪江和夫	柏崎昌年	嶋田保	畑く	横山充	神田清一	宮崎せい	西文雄	山口素	齊藤ふみ	神田き志	島野初代	大附たけ	平沼とめ	新井タネ	平沼たき子	国田貞雄
一一	一一	二	一一	二	一一	二	二	一一	一一	一一	一一	二	二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
宮崎政俊	関根誠一	齊藤清	栗原半	清水榮	加藤益孝	加藤菊江	横溝喜久雄	畑一男	長谷部操	中島のぶ	古池智	首藤淳	安戸忠治	吉田明德	新井昭雄	宮崎菊代	永塚正夫	吉山喜久夫	齊藤季利	村田征二	田中弘次
一一	二	二	一一	一一	一一	一一	一一	二	一一	一一	一一	四	一一	一一	一一	二	一一	一一	一一	一一	一一

海老根千代子	山野辺倫子	桜井文七	細見フサイ	安藤清	田村利光	近藤静子	井関利子	宇田川美智子	堀尾ハツ	堀尾恭子	田村寿久	近藤富子	近藤敬子	中村作馬	山脇元助	新井富次郎	里見寿子	石戸谷ヨシキ	長谷川栄二	黒須達児	矢内健治郎
一	一	一	一	一	二	二	二	二	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一
齊藤菜都慧	井島辰記	井島キクエ	井島高弘	増田しげ	小沢順吉	高瀬武雄	谷国壬伎子	上田鶴子	山野辺キミ	中沢清実	木村丙午郎	中沢和子	内田美津子	間藤昭三	八木邦男	窪田節子	小田綾	三ノ宮信彰	小林百合子	住川房子	北川伶子
二	四	二	二	一	一	二	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
大久保忠示	秋庭正紀	横堀正昇	西村正信	当間庸隆	柳沢勤	馬場弘	菊地益	鈴木公子	西沢芳利	松縄正吉	笠原幸太郎	笠原栄次	中上誠一	須賀文三郎	納見ミネ	鈴木美代	松島こと	清水八重子	福田松蔵	青木重俊	高山三四郎
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
柿沼丑五郎	島田克夫	浅見六太郎	浅見房吉	浅見清造	榎田将一	浅見新治	浅見金作	榎田林造	浅見富蔵	吉川次郎	木島敏夫	小田きよ	更江龍次	木島徳次郎	岩堀一	桑原義男	栗原貞子	北原庄三	依田佳三	小島順太郎	小早瀬宣昌
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
村勢登美	村勢一郎	久保田耕司	宮原芳子	泊芳枝	小暮ケイ	小尾征子	鹿島喜代子	阿部智恵	渡辺栄作	榎田静雄	津田俊子	高木多賀子	堀上一成	堀上ちず子	大谷き代	水上清	関口政治	柴田務	三宮菊枝	名倉てう	高橋たかの
一	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	四	一	一

水間正弘	近藤正雄	橋本光雄	石村仁	朝日奈和郎	高島敬弥	加藤隆司	岩永レイ	井上泰一	戸川博俊	中村栄一	豊田孝雄	船津正	鶴田忠男	高橋正英	肥後道孝	間野貞吉	佐藤忠司	平林義雄	山下雅俊	芥藤潮	上原正尾
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
伊藤義弘	青山真弥	佐久間真治	山本宗平	館岡幸子	春藤きぬ	国延功	島田邦雄	増田隆	元吉英二	長井永茂	杉野昌彦	加藤嘉七	松本梅松	石川光雄	佐藤東一郎	新井元彦	野口英明	渡部道教	中村栄一	小野昇	原正育
二	六	七	六	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
新堀シゲ	田中忠盛	江端つ禰	桂山末雄	江端せん	西山六之助	丸木ひさ江	長谷川美沙	熊倉芳次郎	池田治助	佐久間一	生田目盛三	小木曹千代乃	長谷川千造	福島洋子	井染道人	金子進	金子徳治	佐久間四郎	坂下八重子	安藤久次郎	増田千鶴子
二	二	二	二	二	二	二	四	二	二	二	二	二	二	二	四	二	二	二	二	二	三
小室観子	水村らく	新井はな	上松鈴子	渋谷長太郎	稲垣金弥	鈴木為治	安井菊江	田村賢市	石上喜代子	池田鎮雄	平林政雄	藤田すえ	山口はな	柳沢光之助	水口保	蓮井栄一	渡辺静江	松永寅次郎	江端政吉	岩崎きん	清水きよ子
一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	四	二	二	二	二	二	二	二	二	四	二	二
松野美三	小泉三十郎	佐久間四郎	安藤その	青山真弥	青山みちよ	青山芳枝	青山すみゑ	山本すみ	山本宗平	佐久間一	井染照枝	井染珠枝	永田綾子	春藤三郎	中村田鶴子	三宮菊枝	三宅たい	里見寿子	近藤静子	繁田トキ	発知きの
二	二	二	二	二	一	一	二	五	一	二	一	一	二	二	一	二	一	一	二	一	一

齊藤かほる	鶴岡宇一	原田富雄	池上雪枝	田村喜代藤	石上延治	大橋朝次	高橋一郎	小林一利	池上由記江	綿貫次郎	綿貫芳雄	藤井忠敏	高橋正晴	沢岩次郎	桜井春太郎	伊庭栄司	佐藤梅太郎	鈴木たつ	小野秀一	小野花子	高橋昌子
二	二	二	三	二	二	二	五	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
東田広吉	東田佳代	高梨市郎	高梨ふじ	小池良一	小池やよひ	鈴木洋一	鈴木トリ	熊倉ミツ子	高橋和可乃	安藤その	古川晴巳	春田静	岩田一美	細野きく	安藤敏之助	二本和雄	小淵雅裕	佐久間真治	吉田つね	金子五平	会場実
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
尾藤福之助	松山玲子	石井竹洲	平井英雄	木下健一	霜田ふみ子	霜田昭枝	露木一達	塩見孝	野沢治夫	長谷川親光	長谷川秋濤	加藤謙治	波田野勝男	金沢滋	佐藤みち江	霜田一笠	石井泰二	東城治平	吉田圭子	稲見一郎	夏越美美子
二	一	一	三	二	二	二	九	二	二	一	一	二	二	二	二	二	六	二	二	二	二
吉田一男	露木留吉	泉泰弘	泉富美子	吉川弘	小林重文	平泉迪彦	石井孝次郎	土田米雄	清水貫一	坂井佐千子	三上秀月	本山五郎	布施きよ	船津茂	太田七郎	矢崎幸光	小町太郎	望月菅支子	広瀬春郷	風戸ナツ	酒井杉園
二	一	一	一	二	二	三	二	四	二〇	六	四	二	一〇	一〇	二	二	二	二	一	一	一
鹿倉定子	小川織右衛門	高橋秀男	高橋ふさ	渡辺美男	鹿倉卓士	尖倉善輝	糸井たきし	渡辺章	平林依子	大木八重子	徐綾傑	杉山松男	大木伝太郎	松浦央子	牧野巴	何壁	古瀬文一	芹沢龍平	足立健治	尾上繁実	何桂
一	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	二	一	一	一	一〇	二	二	二	二	二

尾上菁岳	石川景硯	井田真昭	上原真一	田口辰江	林佩蘭	吉田三郎	長島秀夫	菅原惠美子	菅原理郷	岩田白蓮	古井戸華蘭	植田寿賀	木村ふ美	山口三枝子	坂部香苑	山本翠苑	星野正雄	松山峰子	望月俊子	松山功	山本加津子
一	二	二	二	一	二	一五	九	一	一	二	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一
後藤要治郎	旗谷利明	高久保初恵	大熊正邦	宮原正子	小泉徳美	鍋田三平	小針啓二郎	佐藤良人	稲葉正	後藤育三	大野幸助	菊地妙子	高野富治郎	西貝満弥	日比野正司	中村龍泉	金原勇	植田修司	原瀬辰夫	郭美宝	郭瓊瑛
二	一	一	一	一	三	二	二	二	二	二	一	三	三	二	一	二	一	一	二	二	二
溝添淑子	萩原英二	萩原正美	大久保勲	佐藤芳夫	湯座文夫	辰野万里	松田江畔	佐野志津江	三浦大潮	四方恵美	奥野士江	米村陽子	新井順子	河内士京	原榮	吉田朝子	堀江八重子	加藤幸男	鈴木士恭	酒井キヌ子	北川陣一
二	二	二	二	三	二	二	一	一	〇	二	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一	二
高山邦夫	荒井伝吉	菊地庄作	菱谷溪石	尾上繁実	徳井正実	勝山八重	石井泰二	細田アサ子	岩田愛子	島津大巖	菅原ツエ	馬場万里代	沢谷楠雄	山本しな子	佐々木昭	吉沢良江	村沢金太郎	金井政子	繁泉涼川	田崎信男	無文辰典
一	一	三	二	一	二	二	四	二	二	二	二	二	四	二	二	一	一	〇	二	二	二
中村ミエ	菰田みつよ	大橋志げ	林誠一	森山唯一	足立信利	八木定弘	石垣剛	菅野金雄	本橋清	吉沢良江	堤郭子	堤金一	堤秀子	岡谷美佐子	宮下きよ子	安井芳子	千々岩房枝	村沢ミヨ	平賀多代子	吉川君子	武田繁雄
五	五	五	一〇	二	二	一〇	四	四	二	五	一	二	三	二	一〇	五	一	一	一	二	二

荒川澄子	浅沼宣代	山田輝子	倉秋敏子	倉科良俊	飯野素子	岩井祐三	岩淵徹矢	熊谷勝雄	岩井耕悦	安藤利男	佐藤静雄	佐々木正郎	菅原圭子	千葉茂子	伊藤柳川	佐藤正治	萩原ニイ子	菊地精夫	藤田勝	高橋翠川	松田江畔	
二	一	一	一	一	一	二	一	二	二	一	一	一	二	二	二	一	二	二	一	二	一	
中西未吉	小長井実	鈴木はる子	鈴木木彰	鈴木フデ	佐藤佐吉	本田良子	有井万智子	橋本美善	堀田静子	柳田妙子	貞升梅子	北条紀子	北条千秋	北条さと子	佐藤須美子	石井愛子	山野辺亨	高橋てつ	水上清	岡安良枝	森田繁治	
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一	二	一	
本田道子	山口晴一郎	山口奈司	(東京受付)		庄司京子	小林未子	小幡君子	庄司シケ子	鈴木雄二	庄司征雄	鈴木明美	根本多美子	鈴木和雄	鈴木晃子	小林ハル	大東英子	許斐勝彦	許斐喜福子	橋本法子	林章夫	三石育子	石井健
一	二	三			一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
塩野兼慶	小柳金作	窪田しげ子	田中絹子	田中貞雄	小沢富之助	小沢ます子	小沢鼎	小沢とわ	後藤のり	平岡仙一郎	平岡くに	須山琴代	山口耀子	山口晃司	窪田盛隆	木下富久子	久村忠治	山口章二	松本カウ子	松本志づ	本田啓子	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	三	一〇	二	二	二	一	一	一	二	一	一	一	
塩入花子	小武海静	清水洋美	松永満寿子	儘田静江	山田理策	吉野浄子	吉野ひで	羽原絢子	羽原保一	青木新	古内みゆき	越前繁子	竹村勝子	入江靖子	荒井千代子	伊能瑠璃子	由利あつ	町田広作	浅見良江	小沢三郎	塩野知子	
二	三	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	二	一	二	一	一	一	一	一	

木村 ミヨ	大野 正司	今井 正徳	二村 常山	井出 喜代子
佐藤 照覚	相沢 正江	今井 惠依子	岩崎 きみ枝	石井 丑之助
菊地 薫子	塩入 郁子	村上 準	河上 松太郎	大野 共子
武者 マサ	塩入 広子	村上 世志子	岡戸 フミ子	大野 トヨ
池見 一三	塩入 としえ	吉田 快了	高橋 つね	浅倉 房江
池見 裕一	塩入 伸一	吉田 優子	外村 弥一	鈴木 キセ
大森 きよ子	菊地 逸子	川野 武雄	高橋 二平	若林 五郎
豊島 秀子	西川 きく	川野 芳子	関根 英晏	若林 とく
出口 良子	萩原 恵一	平野 孝昌	関根 玉枝	若林 澄子
吉田 不二雄	神田 秀子	根生 保	平沼 弘巳	若林 一二三
安部 玲子	名川 方敏	市村 はる	平沼 壽司	若林 一三三
五十嵐 雅昭	名川 愛	西川 節子	北島 賢司	小林 長次郎
長岡 道子	武者 三枝子	山田 わか	山本 衛	小林 国男
長岡 美信	武者 マサ	小沢 ちやう	浅見 光一	浜崎 和子
持田 美代子	五百住 和美	細田 よし子	大野 寛一	浜崎 茂樹
木村 房子	五百住 八千代	井上 志げ	滝沢 秀	浜崎 達彦
原沢 注連邦	若槻 ひさ子	栗山 久美代	関 寅雄	浜崎 順子
原沢 美江	若槻 とみ	古川 慈良	小野塚 富佐子	真淵 辰男
木崎 美代子	若槻 輝武	高木 豊一	小野塚 典子	真淵 ツナ
関根 やす多	西村 幹	尾張 亮登	松田 新吾	田中 鎮次
関根 記代子	西村 甚平	萩原 恵一	長尾 善三	田中 光子
山田 幸子	西村 雪江	木村 亮信	山本 嘉雄	野口 昇
一	一	七	一	一
二	一	一	二	一
三	二	一	三	一
四	一	一	四	一
五	二	一	五	一
六	一	一	六	一
七	二	一	七	一
八	一	一	八	一
九	二	一	九	一
一〇	一	一	一〇	一
一一	二	一	一一	一
一二	一	一	一二	一
一三	二	一	一三	一
一四	一	一	一四	一
一五	二	一	一五	一
一六	一	一	一六	一
一七	二	一	一七	一
一八	一	一	一八	一
一九	二	一	一九	一
二〇	一	一	二〇	一
二一	二	一	二一	一
二二	一	一	二二	一
二三	二	一	二三	一
二四	一	一	二四	一
二五	二	一	二五	一
二六	一	一	二六	一
二七	二	一	二七	一
二八	一	一	二八	一
二九	二	一	二九	一
三〇	一	一	三〇	一
三一	二	一	三一	一
三二	一	一	三二	一
三三	二	一	三三	一
三四	一	一	三四	一
三五	二	一	三五	一
三六	一	一	三六	一
三七	二	一	三七	一
三八	一	一	三八	一
三九	二	一	三九	一
四〇	一	一	四〇	一
四一	二	一	四一	一
四二	一	一	四二	一
四三	二	一	四三	一
四四	一	一	四四	一
四五	二	一	四五	一
四六	一	一	四六	一
四七	二	一	四七	一
四八	一	一	四八	一
四九	二	一	四九	一
五〇	一	一	五〇	一

富田 倉太郎	富田 佳子	馬場 武次	馬場 久子	藤富 日出明	藤富 峰子	新藤 義雄	窪田 恵子	藤城 武志	山谷 達男	野本 力	橋本 尚三	渡辺 了元	渡辺 一郎	福島 一郎	大里 久枝	小川 恵之	神尾 昌一	小高 英一	持田 延男	桜井 正夫	岡安 洋子	関口 享子
堀越 勇之介	堀越 茂子	堀越 進	尼崎 謙一	小林 雄一	蓮見 栄	新藤 義雄	窪田 恵子	藤城 武志	山谷 達男	野本 力	橋本 尚三	渡辺 了元	渡辺 一郎	福島 一郎	大里 久枝	小川 恵之	神尾 昌一	小高 英一	持田 延男	桜井 正夫	岡安 洋子	関口 享子
竹内 敏夫	元田 本助	奥田 章雄	岩本 文夫	佐々木 皓二	中瀬 京子	鈴木 則雄	武田 まさ子	藤卷 陽子	元吉 伸子	田島 栄作	中島 昭	松村 孝男	松村 昌子	齊藤 康	齊藤 信一	齊藤 隆致	茂木 清記	北川 裕美	岩瀬 重喜	野口 丈一郎	浅見 道雄	関口 享子
高木 幸子	木村 照代	上野 ゆき子	星野 享昭	田中 まつ	島崎 充弘	高松 正枝	比留間 敏夫	内野 悦子	岩田 明	清水 喜美江	清水 簡	金沢 英男	星 彦四郎	渡部 信子	扇谷 智恵子	水谷 フサ	三輪 敏子	奥 顕子	津端 日出子	宍戸 睦子	宍戸 鉄男	関口 享子
宍戸 安恵	宍戸 信行	宍戸 大三	宍戸 幸四郎	宍戸 五郎	宍戸 春美	坂野 シゲ子	石川 加津	小谷 千代子	井出 孝子	松尾 とめ	宇山 玉子	多田 光子	小林 公	本村 和子	鈴木 マサ	久保 裕理子	正野 和夫	山崎 嘉七	小谷野 堅太郎	太田 七郎	松原 辰男	関口 享子
二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一

納経塔建立協讀者芳名

金額	芳名
金 一、〇〇〇、〇〇〇 円	小佐野賢治殿
金 三〇〇、〇〇〇	トヨタ自動車販売KK殿
金 五〇、〇〇〇	オリエンタル写真工業殿
金 一〇、〇〇〇	日研化学殿
金 三三〇、〇〇〇	埼玉銀行殿
金 四〇、〇〇〇	重宗雄三殿
金 七五、〇〇〇	武州商事殿
金 三三〇、〇〇〇	高萩炭砒殿
金 二〇、〇〇〇	船橋ヘルスセンター殿

納経塔建立経過

一万巻の写経を納める、この納経塔は「アフガニスタン」附近で、今から千数百年前に、数百年の間殷盛を極めた、ガンダーラ地区にあった、最も美しい仏舍利塔等を参考にして設計し、救世大観音と相対して、最も風景のよい、面白岩の岩上に建立したもので、外側にはサンチーの門や、釈迦像等インド式レリーフを取り入れた、実に美事な出来であります。

塔内の上部台上には、インド式の釈迦如来が、二頭の獅子を台座として、お立ちになっている全身全色のお姿はさんぜんとかがやいております。

そして、その周囲の棚は、写経五百巻づつ入れた、桧の箱を奉納いたすように仕切られて、整然といたしております。

この台地には点々と花木も植えられて季節には美観を添えます。

救世大観音と三蔵塔に対して、緑と花に囲まれたこの地に皆様から寄せられた、写経壺万巻が永久に納められることは意義深いものがあります。

写経のおねがいと

納経の状況

今秋落慶と納経式をめざして

昨年七月本紙上をもちまして、般若心経一万巻の写経のご奉納をお願いいたしましたから、各位のご理解ご協力によりまして、別紙掲載の通り、二千余巻の浄写を賜りましたことを謹んで、御礼申し上げます。

「写経をした人の功德は無量無辺にして、よく一切の種智を生ぜん。」とか、そして又「一文字の写経には一鉢のご仏体を刻むより大きい功德がこめられる。」と申し伝えられています。

納経塔も、殆ど完成に近づいておりますので、本年錦秋を迎えて、落慶式を挙行いたす予定です。

何卒引き続き多数のご写経ご協力をお願いいたします次第でございます。

写経に込められた種々の願旨

すでにお申し込みをいただいた折本に真心をこめられて、浄写をなさいまして、遠近から郵送いただいておりますので、これを五百冊ずつとして一函に納めて函番を附して納経いたします。

写経の最後に、写経願旨がありますが、各々の願いがございましょう。家内安全、交通安全、商売繁昌、豆そくさい。良い結婚が出来ますように、入試合格、何々家先祖代々菩提のため等があります。

この写経の中には政界に有名な重宗雄三先生を始め書道家松田江畔先生とそのグループ其他有名な方々もあります。

尚、一人で三十巻をご写経なさった方で、常日頃短気と言いましょるか、わがままと申しましょるか……。

おこりっぽい人だったそうですが……三十巻の写経を完了なさると、全く別人のように、おこる事が無くなったという事を間接にうかがいました。又写経したお蔭で文字をかくことがたのしくなったりとか、文字をていねいにかくようになったとか。

これらのことは、まさに写経の利益（えき）というべきこととございましょう。

写経折本申し込み用紙

写経用折本巻数

ご住所

取扱者

ご芳名

--	--	--	--	--

○写経折本は、納経回向科を含み一巻が金五百円

○お一人で何巻でも写経出来ます。

○お申し込みと同時にご納金ねがいたく存じます。

○お申し込先

埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音

電話(〇四二九七〇四局)二七五

練馬区小竹町一の五二 平沼方

電話(九五五)〇四六五

○お払込み先

埼玉銀行名栗支店 鳥居観音納経口座

埼玉銀行練馬支店 鳥居観音納経口座

又は振替用紙にて郵便局振込

(口座) 東京一五五八八五

たちは、もつとひどいめにあわせてやるから、そう思へ、だが、そのまえに、宝象国へいって、国王のようすをさぐってやることにしよう。

黄ほう郎は、からだをひとゆすりすると、若いりっぱな男になった。

「これなら、黄ほう郎とわかる者はいないだろう。にやりとわらい。空高くとんで、宝象国の宮殿にいき、さっそく国王に面会した。

「こちらの百花しゅう姫について、ないみつに話しをしたいのです。」と、もったいぶって云った。

姫のことときくと、国王は身をのりだして、

「おお、ぜひ話してくれ。姫はぶじか、そしてあなたは何？」

「まあ、きいてください。わたしは波月洞に生まれたもので、子供の時から、弓、刀、槍など、習うのが大好きで、今から十三年前の、十五夜の晩、あまり月が美しかったので、一人山を歩いてみると、そばの草むらぎ、がさがさと音をして、一匹のトラがとび出してきた。そのとらは、一人の娘をせなかに

のせていました。どこからさらってきたのだろう。わるいやつ、と思つたので、わたしは、とらにくみつきました。そして娘をたすけたのです。」

「そしてその娘は、……。」

「わたしがつれもどり、てあてをしました。国王さまにはもうおわかりでしょう。それが百花しゅう姫です。にくい大とらには、にげられたが、わるいことはできぬもの、いまここへきて、その大とらを見つきましたぞ」と云って、黄ほう郎は、三蔵法師をゆびさした。

「あの方は、天竺へ経文をとりにかれる三蔵法師というお方だ、大とらなどとはとんでもないこと。しつれないないように。」

「いや、いや、法師とはまっかないつわり、大とらにちがいない。ごらんなさい。いま、法師めを、ほんとうの姿にして、おめにかけましょう。」

黄ほう郎は、法師のそばへいき、じゅもんを唱えながら、ふつと、いきを吹きかけた。

すると、それがまほうだったので、法師はたちま

ち、一匹の大とらになってしまった。

「うおーっ。」と大きくうなり、ひげをふるわせた。

宮殿は大きわざとなり、国王はおくへにげ込んだ。

けらいたちは弓矢をとりだし、刀をぬき放ち、逃げようとした大とらを取りかこんで、たちまち生けどりにしてしまった。

「いかがでござる、うそではありますまい。」と黄ほう郎は、とくいに云うのであった。

「本当にありがとう。今まで法師とばかり思っていたのは、わたしのうかつなこと、あのままにしておいたら、宮殿じゅうの者が、食いころされてしまったかも知れない。あなたこそ、いのちの恩人です。」
国王は、ころだましにだまされてしまい、酒やさかなを山ほどだして、おせじをつかい、もてなしたお気の毒な三蔵法師は、黄ほう郎のまほうで大とらにされたばかりか、つめたい鉄のおりへいれられてしまった。

八戒も悟浄もないから、助けてもらうこともで

きない。

「こまったことになった。どうしよう。」

とらになった法師は、おりの中を、のそりのそりと、いったりきたり、その声もいまは法師のことばでもなく、人間の声でもない。おそろしいとらの声である。

法師ののってきた白馬は、うまやの中で、法師がとらになったという、うわさをきいた。

「えらいことになった、なんとかして法師さまをおたすけしなければならぬ。」

と思った白馬は、たずなを食い切るが早いか、うまやの外へとびだして行った。そして、もとの竜のすがたになり、宮殿へはいつていくと、黄ほう郎が酒をのんでいた。

「だい分酔っているようだ、うまくだまして、早くお師匠さまをお助けしよう。」

そこで竜は少女のすがたにばけて、酒徳利をもつて、黄ほう郎に近づいていった。

「あなたさま、おひとりでおさびしいでしょう。」

わたしが、おどりをごらんにいれましようか。」

「おまえ、おどりができるのか、それはおもしろい。いさましいところをおどってくれ。そらこの刀を持って、おどるがよい。」

「はい。うまくはおどれませぬが……。」

少女になった白馬は、剣をふりあげるなり、いきなり黄ほう郎に切りつけた。」

「なにおするっ。」

さすが、まものの黄ほう郎だけあって、酔っていてもゆだんはない。ぱつととびのくなり、もう一本の剣をぬいて、少女のふる剣をがっちりとうけとめた。両者はげしくたたかっているうち、すきを見つけた黄ほう郎、そばにあったろうそく立てを、えいと少女めがけてなげた。

「ぞんねん。ひとりではだめだ。」とさけび、もとの籠になって、堀にかくれて、黄ほう郎の目をのがれた。しばらくして、白馬にかわり、うまやへもどった。体ぢゆうあせでびっしょり、はあはあと、いきせききっていた。そこへ、波月洞から八戒がもどつ

てきた。黄ほう郎のとりこになった悟浄を助けようと、法師のちえをかりにきたところだった。

「おい八戒のきょうだい。」

白馬は、そう話しかけたから、八戒は、腰をぬかすほどおどろいた。

「おまえは、口がきけるのか、ばけものの馬だな。きみわるい馬だそばへよるな。」

「それどころではないよ、お師匠さまが黄ほう郎のまほうにかかって、大へんなのだ、大とらにされてしまったぞ、早くおたすけする方法をかんがえてくれ。」

「ぞんねんだが黄ほう郎はつよすぎる。と云って、このままにはおけないなあ、よわたたな。」

そこで白馬が気がついたことは、悟空なら、きつとなんとかできるだろう。それには八戒を花果山へとばして悟空の援助をたのむこと以外に方法がない。そこで八戒は雲にのると、大いそぎで、花果山すいれん洞へとんでいった。

きよろきよろしながらよく見ると、大ぜいのさる

たちにかこまれて、孫悟空は石の上にあぐらをかいていばっていた。

「おーい、悟空のきょうだい。」

八戒がくるとは思ってもみないので、珍らしい、これは破門されたのではないかと、気をつかった。

「八戒なんでここへきたのだよ。」

「なんだどころかい。お師匠さまが、大へんだ、きょうだいでなけりゃあ、どうにもならなくなつてしまったよ、早くいっしょにきてくれ。」

「なに、……おししょうさまが……でも何が何でもまっぴらだよ。」

そう云つて悟空はそっぽを向いてふくれた。

「わからずやお師匠さまのことなど、知るもんか破門されおいだされたこの悟空には用はあるまい。」
「きょうだい、そ、そんな情ないことを云わんでくれ、五百年もとじこめられていた石の中から、おまえをだしてくれたのは誰だっけ、お師匠さまではなかったのか、……恩を忘れた恩しらずめ、そうだからわかつた、黄ほう郎が、そう云つてたっけ、

孫悟空がきても、ちつともこわくないってね。おまえはこわくていかないだらう、そうなのか。」

「ばかを云え、黄ほう郎とか云う、そのばけものなんかひとひねりだ、よし、いこう、おれのわる口を云つたやつをそのままにしておいては聖天大聖の名にかかわる。悟空は、八戒のことばに、ころりと気がかわり、かんかんになつて赤い顔を一そう真赤にふくらませ手をふり足をばたつかせていた。





田舎医者(其の六)

見川鯛山

挿絵 おおば比呂司

鮒

休診日の朝はいつもより早くおきる。すると台所の方でうちの奴がどなる。

「おや、起きたね。あんたが早く起きすつとこみると、なるほどきょうは日曜日か、で、今日は何をする気？ 釣れもしないのに魚つりかいやっぱり。」

だが、私は返事なんかしない。ねまきのまま起きていって、玄関の曲った柱に「本日休診」の札をぶらさげ、不敵な笑いを浮かべながら、一人言をいう。「きょう一日、もう絶対に病人を診ないぞ。誰が、なんてったってだ。」

だが、それをききつけてまたうちの奴が大声でいう。

「おや、あんた、まいにち暇で休診してるみたいだけど、やっぱり休診日なんかあんのォ」

古くなる、女はどうして、こうもズケズケと、ものを云うのだろう。でも、私はつんぼのふりをして、そのまま源さんのごみ捨場へ出かけていく。このミミズは赤くてよく肥えてて、鮒には評判がいいのだ。かんずめのあきかんが、ミミズでいっぱいになると、がらっと窓が開き、きまってるひげ面の源さんがそこから怒鳴る。

「メメズ、熱さましにいいだってナ。世間じゃ云ってるぞ、あんたここのメメズ掘ってって薬に使ってるっちゅうが、ほんとか？だが、そんなこたア気にすつことねえぞ。遠慮しねえでたんと掘ってげやと、私にべろを出してから、亀の子のように顔を

ひっこめ窓の中へかくれる。だが、ミミズのごとは源さんが世間へ云いふらしているのだ。私はいつかきつと、この男にミミズを煎じて吞ましてやるつもりだ。

家へ帰ると、私はぶすつとして朝めしの膳に坐るすると、チャブ台の向こう側でうちの奴が云う。

「ちよつと手を出してごらん。フンフン、やつぱりミミズくさい。あんた手洗つてないね!!」

「少し匂うか?」
「少し? とんだわけ。そんだけくさけりゃ蓄膿症の人だって匂うネ!!」

と、やつぱり医者 of 女房みたいなことを云う。彼女はそして、交通巡査のようにさつと洗面所の方を指さして云う。

「さつ洗つといで!! さもないとごはん食べさせない。医者 of のくせに不潔だよあんたは」

「でもミミズは薬になるそうだよ。熱さましにいいつて、さつき源さんが云つてた」

「アッキレタ!! そんなこと云つてるから、病人

はみんな、町の医者んとこへ行つちまうんだよ!!」

せつかくの、休診日の朝が、いつもこんなである朝ごはんがすむと、それでもうちの奴は、残飯を握つて弁当をこしらえ、私の腰にぶらさげてくれる。

「さ、たんと遊んでおいで。あんたがいないと、私もせいせいするよ」

よく肥えた彼女は、私がいなくなると、雑誌を読みながら、煎餅や饅頭をむしゃむしゃと食べ、腹がいっぱいになると、そのまま夕方まで大蛇のようにひるねをするのだ。

釣竿をかついで家をとび出すと、もう私は、口笛を吹いて楽しい。新緑の高原に、かつと朝日が輝き梢のてっぺんで黒つぐみが鳴く。私がうきうきして野道を石けりしながら跳んだら、そのたびに腰の弁当がお尻であつたかくはねた。

——きょうは、でっかい奴がうんと釣れそうな気がするぞォ!!

いつも、私はそう思うのだ。

森の中の池には、私のほかに誰もいなかった。水

昌のようなその静かな水面で、ピチッと鮒がはねた
「しめしめ、いるぞ、いるぞオ!!」

私は生つばをのみこみながら、そわそわと道具を
そろえ、いちばん美味そうなミミズをつけて、そー
っと糸をたれた。すると、真赤な浮子^{うき}がピンと立っ
て、私の心はもう氷のように静かだった。

十分、二十分、三十分、私はじいっと浮子を見つ
めているのだが、この赤い小っちゃな生きものは、
郵便ポストのように動かないのだ。何本目かの煙草
を、水の中へジュンと捨てて、私はいつものように
草いきれの土手にひっくり返って、シャツポを顔に
かぶせ、大の字で眠る。早起きしたうめ合わせを、
私はいつもここでつけるのだ。グッスリとねこんで
いたら、誰かが近づいてきたようだった。そしてそ
の男は、私の弁当を盗もうと、すきをうかがい、そ
ーっと手をのばしてくるのだ。だが、私には剣道の
心得がある。その時ガバツと起きて男の手をつかま
えてやったが、そこに誰もいなかった。

「夢かな?」

きよときよとあたりを見廻すと、案のじょう、さ
つき私が釣っていた所に、怪しい男がかがんでい
た。怪しい男がこつちをふりむいて、にこにこ笑う
と、それは穴沢の吾助さんだった。

「先生さん、ようぐねでダサ。すげえいびきかいで
た。だから俺、最初はこの池の主でもねでんのかと
思ったぞ」

「そんなにねむっていたのか?」

「ンだ。もう一時間の余もねむってダサ」

「ほう? で、あんたそこで、ずうっと何してたん
だね?」

「おらか? おら先生さんどこさ来ただわな。そし
だらあんだ眠ってだべ、だから起しじゃ悪いと思っ
て、ごぞであんたの代りに鮒つってだだ」

「へえ……」

「あんたいいとご見づけただな。この場所とうでも
よく釣れるぞ」

「釣れる?」

「ンだ。俺うんど釣ったぞ、ほれ見ろ」

吾助さんが水につけた私のびくを持ちあげてみせると、型の良い鮒がピチピチ跳ねて重いほど釣れているのだ。

「おかしい。ずいぶん釣ったんだな」

「なあに、ちっどもおかしくねえだ。なんぼでも釣れつつオ。別に俺が上手てえ訳でもねえだ。あんたの竿や仕掛けが上等なのよ。それにメメズもいいメメズだ」

「ふーん」

「そうだどもサ。まだまだいぐらでも釣れつつオ。

ホーラな!!」

と私の目の前でかい奴を、もう釣りあげて見せた。私は見ないふりをしていた。

——間抜けな魚めが!! よくもまア、あんなにあつさり釣られやがる——

ブツブツ云いながら草の上にあぐらをかいて、私は弁当を食べることにした。握り飯にかぶりつくとその中に大きな梅干があつて、あごが酸っぱかった「あん蓄生め!! なんだってこんな大けえ梅干を押

しこんでおきアがつた」

私がスッパイ顔をしていたら吾助さんが又釣った「ホーラな。先生なんぼでも釣れつべ」

と、意地悪吾助がそれを見せびらかすので、とうとう私は云つてやった。

「そんなにいっぱい釣つたつてあんた、唯釣ればいってもんじゃないな。あとの楽しみがなくなるぞ」

「なーるほどな。やつぱり偉えもんだ、あんたこそ本當の釣師てえ奴だな」

彼はうわの空でさかんに感心しながら、浮子から目をはなさない。もう面白くて仕方がないらしいのだ。だから私は又云つた。

「いったいあんたは、なににここへ来たんだね? 他人の釣竿を勝手に使つて、鮒を釣りにやつてきたんかねあんたは!!」

「俺か?、いや、俺あ魚釣りにきだんじアねえだ。俺ア診察してもらいにきだだわな」

「診察だと?」

「ンだ。俺朝っぱらから腹がキリギリ痛えた、そしてクソくだるだ」

「きょうは駄目だな。休診日だ」

「そうだつてなァ、あんたの奥さんがそう云つてだつて」

「そのとおりだ。気の毒だが私は休みだ」

「こまったな、そりゃ……」

と、口では云つたが、このずうずうしい男は私を見むもきしないで、さっきから浮子ばかり見ているのだ、だから私はまた云つてやった。

「困つたつて駄目だ、全く気の毒だが、これこの通り、私が持ってきてるのは釣道具だけだ、なんぼ名医だつて、鞆がなくちゃァヒヒヒ……」

と、私が意地悪く笑つてみせても、彼はすこしも反応を示さず、また、とびきりでかい奴を一匹釣りあげながら云つた。

「鞆、あるんだ」

「なんだつて?」

鞆はなァ、診療所行つたらあんたの奥さんが持た

せでよごしただ、池さいつて診察して貰えつてな。そこさ、あるだ、ほおれ……」

と吾助さんがひげだらけの顎をしゃくると、かたわらの草むらの中に、見るもけがらわしい豚皮の私の往診鞆がガマ蛙のようにかくれていた。

「チェッ、いまいましいでしゃ張りめが!!」

うちの奴に腹を立てて一人言を云うと、

「なに? いま何ソドが云つただだね?」

「いや、別にあんたにァ関係ない」

「フーン、そうがね。実ァ俺、いまあんまり腹痛ぐねえだ。今朝からみつど、もうずうつと具合いいだ。鮎釣んでたら、気ィまぐれで、痛みァ楽になつじまつただ。俺もこれ嫌えな方じァねえもんでな、ハハハッ」

と、釣針にミミズをつけて彼がまたポーンと糸を垂れた。このまま放つといたら、池の鮎を全部釣られてしまいそうだった。私のはらはらしてると、こつちえ背を向けたままで彼が云つた。

「あんたどこの奥さん、あれァいい人だな。」

昼寝こいでだっげが、俺いったらすぐ起きでくれた。親切にこごを教せて、鞆まで持たせてよごしただわ。それに、なアがなが別嬪だわ」

とおせじを云ったが、なアに、こんな男にうちの奴のことなんかわかるものか……あの栄養のいい別嬪は、早いとこ彼を追っばらって、昼寝の続きをやらかそうって腹にきまつているのだ。

だから私も、早いとこ、吾助さんを追っばらって釣の続きをした方がいい。しかもこの釣場には、さつきから鮒がウヨウヨ集つてゐるみたいだ。でなければ、こんな百姓おやじにあんなに沢山釣れるわけがない。

「さっ、せつかく鞆まで持つてこられちゃア、なんぼ休診日だつて診てやらない訳にアいかんね。ま、こつりへきて裸んなれよ」

「そうだな。いまアあんまり痛くねえだが、やつぱ診でもらうべか、せつかくだもんな」

と反対に彼の方で恩きせがましい。だから私は腹を立てながら診察して、一番痛い注射をぶつてやつ

た。出来ることなら餌箱のミミズもこつそり呑ませたいくらいだった。注射がすむと、吾助さんが云つた。

「痛え注射だ。この方が腹よりよっぽど痛え、まさかあんな、これ効くだべえなア……」

「ああ、その筈だ」

「そんならかまアねえだ。で、注射の銭アなんぼになるがネ？なんなら、この鮒全部、あんだにやるだ。それでどうだね？ほれこんなにいっぺえ釣つただぞ」

「ああ、銭はそれでいいから、早く家へ帰つて寝てしまえ、さつさとな」

「じゃ、悪いげどそうすッペ」

吾助さんが、帰つていった。そして私はわくわくしながら鮒つりにかかった。十分たつと私のわくわくが鎮まり、二十分たつと腹が立った。

以下次号



第十二集

十一月より二月までの御申込
 一、敬称は略させていただきます
 一、〇印はA観音
 一、間違がありましたら御教示くだ
 さい

住所	氏名	住所	氏名	住所	氏名	住所	氏名	住所	氏名	第十二集
名栗村	枝久保 茂一郎	熊谷市	菅沼 もと	江東区	石毛 万馬	北區	石黒さと子	練馬区	青山 精一	合計 一二三 内訳 BA 七四 四九
松本市	矢島 一喜	〃	友村 弥生	墨田区	恩田 君江	船橋市	石渡たま子	青梅市	中村 良次	
〃	大木 節子	江東区	仲村 恵美	越谷市	森田 善次	世田谷	浜口 求	所沢市	森沢 恵吉	累計 八、〇六九 内訳 BA一、六一六 B六、四五三
荒川区	先崎 芳平	〃	清田 春蔵	大田区	岡田 正一	青梅市	根岸 成典	〃	森沢 イ子	
名栗村	中村 信吉	〃	吉川 忠志	〃	西村 敏子	入間市	伊藤 浩司	〃	平田 儀藏	
浦和市	三本 晨煌	町田市	畑 カノ子	金沢市	福田 禎冗	名栗村	氏子十八軒	〃	荒畑正三郎	備付品御奉納芳名 櫻賽銭箱
青梅市	加藤 作	鎌倉市	〃 いく子	大宮市	中井 実男	所沢市	萩原 一男	板橋区	安座間正松	
飯能市	加藤タマエ	〃	三森良次郎	鎌倉市	佐々 理典	〃	外 一 九 体	〃	石川 静子	
浦和市	古藤早代子	〃	畑 紀子	〃	佐々香代子	名栗村	町田 勅藏	江川	村上 憲弘	東京 新妻治郎殿 東京 堀川幸正殿 所沢 小山権之丞殿
松本市	赤羽茂一郎	〃	遠藤 菊枝	入間市	清水 多彌	島田市	土田 米雄	鎌倉市	村上 憲弘	
荒川区	古尾 貞吉	港区	塚越覚一郎	横濱市	山高 幹夫	小平市	高橋 正晴	江東区	寺尾 長吉	飯能 水上 清殿
台東区	小泉三十郎	〃	田中 文吉	北區	山本 宗平	朝霞市	小寺 三三夫	所沢市	指田 万平	
品川区	小林 政雄	大垣市	柴 益次郎	豊島区	安藤久次郎	〃	小寺 ヨネ	〃	山田 陳善	香爐 立川 オリエンタルアート
葛飾区	江端 つ瀬	青梅市	和世音子	千代田	坂部 吉郎	東松山	野口 志ん	〃	吉田弥五郎	
足立区	蓮井 栄一	大里	柴 益次郎	横濱市	伏見 康夫	日野市	渡辺 貞枝	〃	中島 広市	川村 社長殿
杉並区	村上 秀義	江南村	和世音子	中野区	倉田 照子	秋川市	佐藤 啓子	〃	北田伊兵衛	
横濱市	成松 キヨ	熊谷市	和世音子	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

鳥居観音だより

丑年元旦祈禱執行

一年の計は元旦に、又人それぞれの諸願を真心以て祈ることは、古来日本人の風習として実行されています。当山の新年祈禱も役員各位を始め、篤信者の方々の厚い信仰からのご協力により、尙千百余名に及ぶ祈禱のお申し込みがありました。

十時から開祖平沼先生ご夫妻を始め、必ずこの初祈禱にご来山の、川越講、親友講、千ヶ瀬講の講元代参と、篤信者各位のご参列をいただきまして、新春の気分あふれる中に、家内安全、諸願成就の祈禱が執行されました。

白雲山頂の救世大観音は、雲間からのぞいた初日にその白が空に極立って浮び出て、その慈顔と、容姿は実に優雅に拝されました。

一月の参拝状況

当山も年と共に参拝の方が多くなりました。信男信女 それぞれ、着飾った方達が、自家用車でご家

族ぐるみ、三々五五来山されて、本堂から、山頂の救世大観音へと登られて賑わいました。本年は天候もおだやかで、浅春を思わせる日和でした。

大正月が過ぎますと、すぐ小正月です、この小正月は成人の日もありまして、晴着姿の成人者が多く見えました。

バスでの参拝団も何組かありまして、参拝後庫裡でなごやかにお茶を召し上って、花の頃を約して、下山なされる方もありました。

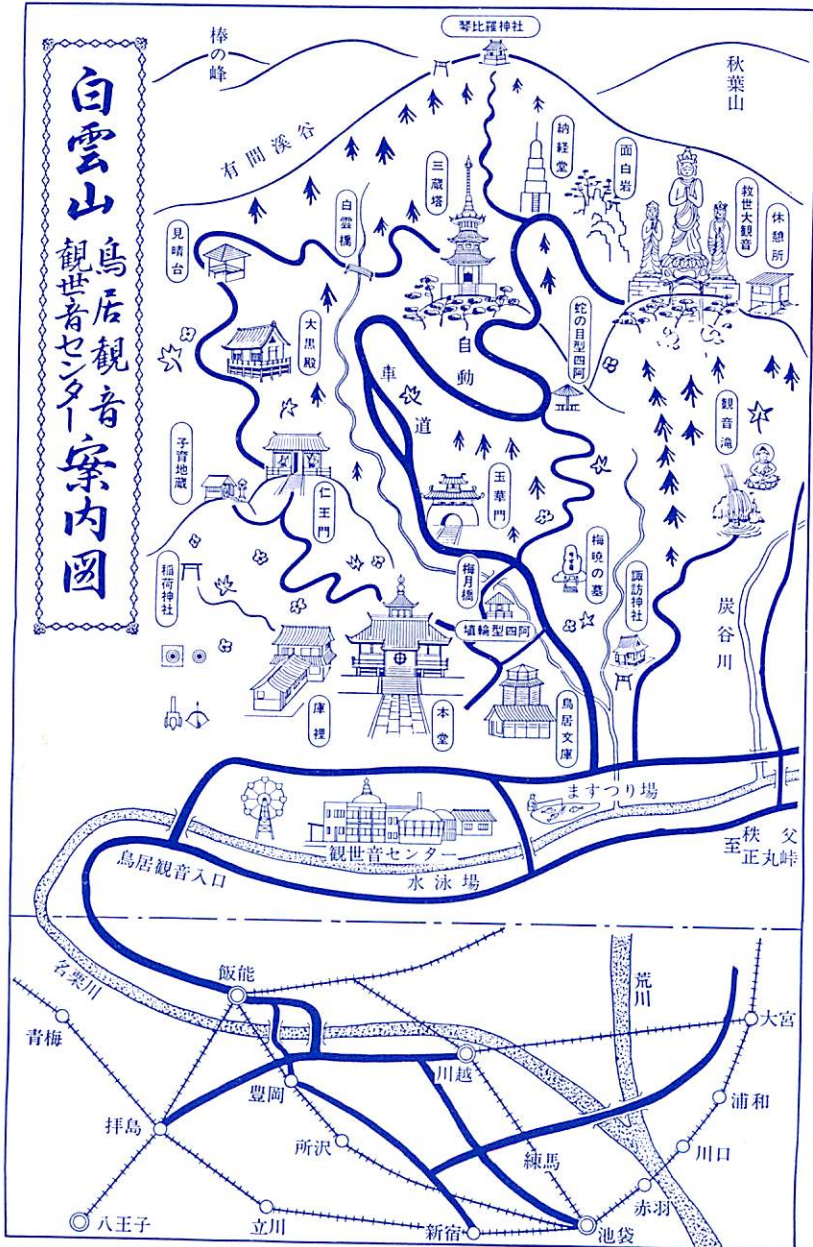
祈禱について

祈禱は色の願いがありまして、本年も正月に入りまして、元旦祈禱から引続いて、各々祈禱のお申し込がありました。幸に、専任小林老師がおられて、常時お申込を受け即座に祈禱を謹修致しますので、ご一諸に祈禱していただけて、来山の方はよろこんでおられます。

とりあ 第二十六号 発行日 昭和四十八年四月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
印刷所
発行所 鳥居観音電話〇四二九七〇四、名栗二七五番

白雲山

鳥居観音
観世音センター案内図



春の行事

- 春季例大祭……………4月17日
 - 本堂にて……………10時より、法要
 - 玄装三蔵塔……………11時より、法要
 - 救世大観音……………11時半より、法要
- つつじ祭……………4月18日より4月24日迄
- 花祭り……………5月8日より5月14日迄
 - 本堂にて……………13時より 甘茶花供上

観音信仰の霊場である白雲山は、うっ蒼たる杉檜の老木と、萌えるような新緑の中に、紫・赤のつつじ其他色とりどりの花が四月から六月にかけて、全山を彩ります。その間に真白な大観音、三蔵塔、写経塔がくっきりと浮び、緑と花に調和して実に目を見張るような天下の絶景です。



四月から五月にかけて全山数万本のつつじが美事です。